

# 草庵仏教

第164号  
(発行日)  
2004年2月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638113 西宮市  
甲子園口2丁目7-20  
電話・FAX (0798)  
63-4488  
(発行人) 土井紀明  
メール：kimyou4@yahoo.co.jp  
http://www.eonet.ne.jp/~souan

## 《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉  
毎月22日午後2時  
.....
- 〈念仏座談会〉  
第1土曜日午後3時  
第3土曜日午後3時  
\* 8月の〈同朋の会〉及び  
第3土曜日の念仏会は休み。

## 浄土真宗のお念仏

### 《 世俗的な念仏 》

M 「お念仏とは」  
D 「ナムアマミダブツと阿弥陀仏の名を称えることです」  
M 「私たちは念仏する場合がございます。いろいろあると思いますが、みなさんどういう気持ちで称えているのでしょうか。みんな同じ思いで称えているのでしょうか」  
D 「いいえ、いろいろな思いで称えていると思います」  
M 「たとえばどういう気持ちで称えていますか」  
D 「仏前の習慣的な儀礼や作法として称えている場合があります」  
M 「それはどういうようなものですか」  
D 「お内仏の前に坐ると仏様に挨拶するような気持ちでとか、祖父母や両親が称えていたからとか、お仏壇の前に坐ると称えるのが作法だというような受け取り方です。いわばなんがなしにそうするものだと思って称えているのですね」  
M 「他には」  
D 「たんなる仏前での挨拶程度のもので、さらに一歩踏み込んで先祖供養として称える人がいます。これは念仏することによって、念仏の功德が〈先祖の霊〉や〈亡き人〉に届いて〈死後浮かばれますように〉とか〈よ

い世界に行きますように〉などを願ったり、あるいは〈先祖の霊がタタリませんように〉というような思いで称える場合もあります」  
M 「そういう話はよく聞きます。他には」  
D 「現世利益として念仏を称える人がいます。昔、甌島のお寺に居ました時、檀家さんの法事である漁師さんの家に行きました。法要が済んだ後お斎になり、その席でそのご主人に〈どういう気持ちで手を合わせますか〉とお尋ねしましたら、〈今日、大漁でありますようにナンマンダブ〉と申されました。案外多くの真宗門徒が〈どうぞ今日一日無事でありますように〉とか〈悪い病気にかかりませんように〉とか〈商売繁盛しますように〉とか、〈孫が受験に合格するように〉と、〈というようなお願い事や祈願の気持ちでナンマンダブツと称える、そういう場合が多いですね。これは現世利益を期待して称える念仏です」  
M 「他には」  
D 「いままでの念仏は世俗的に受け止められたもので、純粹な仏教での念仏ではありません。これから申す念仏は仏教における行としての念仏です。すなわ

ち、さとりを開くための自力の修行としての念仏行というものがあります。たとえば天台宗では比叡山に常行三昧堂というお堂があり、ここでの修行の中に、専ら阿弥陀仏を礼拝し、心に阿弥陀仏を念じつつ、阿弥陀仏の御名を称え続けるという念仏行があります。これは阿弥陀仏を感得するために自ら自力修行の念仏行です。聖人は天台宗の修行僧だった時にこの行をされたようです。3ヶ月間横になつて寝ることなく、阿弥陀仏の周りを念仏申しながら回り続けるという大変厳しい行です」  
M 「こういうのが自力修行の念仏なのですか」  
D 「ええ一つの典型的なものです。仏の悟りを開くために念仏を行じるのです。この修行による効験・効果によってさとりを開く道に進んでいこうとするのです」  
M 「比叡山での自力の修行としての念仏を聖人は棄てて、法然聖人のもとにいかれたとお聞きしていますか」  
D 「そうですね。自力の修行としての念仏を離れ、法然聖人から阿弥陀仏の本願の行としての念仏のいわれをお聞きになり、一生涯本願の念仏に帰せられました。この念仏と自力修行の念仏とは同日に論じれないほどの内容の違いがあります」  
M 「どう違うのですか」

D 「自力の修行としての念仏は、悟りを開くために行う、みずからの修行としての念仏行です」  
M 「では本願の念仏は？」  
D 「本願の念仏については、お釈迦様が仏説無量寿経に本願念仏のいわれをお説きになつています」  
M 「それはどのような内容の説法ですか」  
D 「佛説無量寿経によりますと、阿弥陀仏はもと法蔵菩薩という菩薩でした。この菩薩は一切衆生を仏たらしめたいという広大な願いを起こされ、それによつてご自身もこの上ない佛(アマミダ)に成りたいと志願を起こされたのです。そして衆生のありさまを徹底的に観察され、衆生には清浄なる真実の心がなく、と、それゆえに苦界を流転してやまないことを徹見し、この虚仮不実にして穢悪の衆生をいかにして清浄真実の仏陀たらしめることが出来るかをながながとお考えになりました。そしてついに、法蔵菩薩ご自身が一人一人に代わって、一人一人を佛にするための修行をなさつたのです。それは欲や怒りの全くない清浄な修行であり、六波羅蜜という菩薩行を修められました。その修行は計り知れないほど長い修行でありましたが、その結果修行が成就して、一切衆生が佛になるための仏因はすでに完全に出来上がりました。そして

法蔵菩薩は阿弥陀仏となられ、一切衆生が佛の悟りを開く境界としての浄土は出来上がったのです。後はただ私も衆生が佛になる元手（仏因）をいただくだけです。頂くかどうかだけが衆生に求められているのです。ざっとこのような内容なのです」

M 「私が佛になる修行はすでに阿弥陀様が為してくださったということとはまことに驚くべき事ですね」

《仏因の施与》

D 「そうなのです、まさに驚きであり不可思議なことです。さてこの佛になる種をいかにして衆生に与えるかということですが、法蔵菩薩は佛になる功德のすべてを南無阿弥陀仏として衆生に与えようとされたのです」

M 「南無阿弥陀仏にこめてということですか」

D 「そういつていいと思います。さてその南無阿弥陀仏の名号を私に聞かした、（汝を佛にする元手はすでに出来上がった。そのままなりで浄土に迎えて佛にする）すなわち（かならず助ける）の仰せとして衆生に与え聞かされるのです。この仰せを衆生に聞かせることによって佛になる功德（名号）を衆生に与えるという、これも実に不可思議な方法です。このことは無量寿經に（其の名号を聞いて信心歓喜すること、乃至一念せん、至心に回向したまえり）と表されています」

M 「そうすると南無阿弥陀仏の仰せを聞くことが仏になる因をいただくことになるのですね」

D 「ええそうです。実に不思議なことです。ただここで（聞く）といつても、単に耳で聴いているということに止まるような聴き方ではなくて、聞信といわれ

るように、名号のいわれを信じるといふ聞き方です。聞くとは、（汝の佛になる仕事は全面的に引き受ける、そのまま助ける）といふ仰せを仰せのままに聞き受けたことです。今この名号は（私のためであった）と信受しているのです。名号の仰せを聞き受ける時、如来の大悲が私に届いて信心となり、信心として仏になる因をいただいたのです。その位を正定聚不退転の位といひ、浄土に生まれることが定まった位なのです」

M 「そうすると阿弥陀仏は私どもをみそなわし、私どもを救うて佛になさんかのために思案し修行なさり、それを南無阿弥陀仏に仕上げ、私にナムアマダブツの大慈悲を聞かせることによつて、私どもに信心として佛になる因（名号の徳）を与えて下さるのです。それによつて、かならず浄土に生まれて佛になるべき身として下さるといふ、とつともなく有り難いお慈悲なのですね」

D 「ええ、そのように私を全面的に救う働きをしてくださるのを往相回向といひます。そして

佛になるといふことは、衆生救済のために無窮に活動を続けるという偉大なる働きに出させてくださるのです。これを還相回向といひます」

《我が身を知る》

M 「ただそういう仰せを聞かせて頂いてもすなおに信受できないのが悲しいかな私どもの姿ですね」

D 「ええ、それが一番痛ましいことです。それゆえ善導大師は弥陀の本願（仰せ）を聞き受ける信心は自分の姿を（我が身は現に罪悪生死の凡夫、広劫よりこの方常に沈み常に流転して出離の縁なき身と深く信ず）といふ信心が裏打ちされていると、教えられています」

M 「なぜ我が身の姿をそのように信じるのでしょうか」

D 「（汝の往生は私がすべて受け持つから我をたのめ）という仏の大悲の言葉を受け入れる信心が起るのには、（私は如何にしても我が思案、我が能力、我が行いなどの一切をあげても我が身を救うこと無効であり、無力である）と知る人においてだからです。それはちやうど、はるか彼方の向こう岸まで泳いではい

るがとて泳げそうにないにもかかわらず、まだ自分は泳げるとおもつて自己過信し、アップアップしている、そういう者の所にむこうの陸から船が迎えに来て、（さあ、そのままこの船に乗れよ、渡してあげるから）と

親切に声をかけてくださつても、まだ自分の力で泳げると自分の力を過信している者は素直に船に乗らないようなものです。それで善導大師は自分の能力の限界を知ることが大事であるとお教え下さるのです」

《御名を称えよ》

M 「でも何故念仏を口に称えよと仰せられるのですか」

D 「称えなければ南無阿弥陀仏の名号は直接には耳に聞こえてきません。ナムアマダブツナムアマダブツと称えることによつて、ナムアマダブツが我が耳に聞こえてくるのです。そしてこの南無阿弥陀仏はどのような出来たのか、なんのために私に与えようとされるのかという名号のおいわれを聞いて聞いて聞き抜いていく。そうすると、耳に聞こえるお念仏の声がそのまま本願の思召しであり、端的に（引き受ける）（助ける）の大悲の仰せと感ぜられてくるのです」

M 「Dさんはよく（我が名を称えよ）とおっしゃいますがこれはどうなんですか」

D 「（かならず助ける）の阿弥陀仏の仰せも（引き受ける）の仰せも（我が名を称えよ）の仰せも同じお心です。どの言葉で味わつてもかまいません。ただ第18願の願文のお言葉は（十念に至るに及ぶまで若し生れずば正覚を取らじ）で、これは（我が名を称えよ、かならず浄土に生

まれさせる）という誓いです。（我が名を称えよ）は、（我をタノメ）とか（必ず助ける）とかの思召しと同意ですが、私個人としては（我が名を称えよ）の仰せが無上に有り難いです」（了）

## 永代経とは

永代経とは、そういう（お経）があるわけではありません。

私たちは、肉親の死をいたみ、永く年回法要をつとめますが、つとめる側の人間も同様に、いつかはこの世を去らなくてはなりません。そうなるかとと誰が法要をつとめるかということが問題になったり、また長い年月が経過するなかで、故人のことを知る人もなくなり、やがてすっかり忘れ去られてしまいます。そのため、このようなことがないように祖徳をしのんで仏事莊嚴を永代にわたつてお寺にお願いするので、ことに大切な意味は、み教えを永く子供、孫、ひ孫にいたるまで伝えていくことであり、それによつて、佛の教えが永く広く伝えられ、多くの人々の救いの光になることを願つて永代経の法要がいとなまれるのです。

《念佛寺では九月二十二日に永代経法要を勤めます》

# 歎異鈔 第十四章第五講

また、念仏のもうされんも、ただいまさとりをひらかんずる期のちかづくにしたがいても、いよいよ弥陀をたのみ、御恩を報じたてまつるにこそそうらわめ。つみを滅せんとおもわんは、自力のころにして、臨終正念といのるひとの本意なれば、他力の信心なきにてそうろうなり。

(歎異鈔第十四章)

現代語訳(また命が終わろうとするときに念仏することができるとしても、それはさとりを開くまさにその時が近づくにつれて、いよいよ阿弥陀仏にすべてをおまかせし、そのご恩に報いる念仏なのでありましょう。

念仏して罪を消し去ろうと思うのは、自力にとらわれた心であり、命が終わろうとするときに阿弥陀仏を念じて心が乱されることなく往生しようと願う人の本意なので、それは本願他力の信心がないということなのです。

\*

「また、念仏のもうされんも、ただいまさとりをひらかんずる期のちかづくにしたがいても、いよいよ弥陀をたのみ、御恩を報じたてまつるにこそそうらわめ」という文章に関して、国語学者の安良岡康作氏は『この叙述は順序がやや混乱している、句の順序を変えて、「また、ただいまさとりをひらかんずる期のちかづくにしたがいても、念仏のもうされんも、いよいよ弥陀をたのみ、御恩を報じたてまつるにこそそうらわめ」と

整える必要があると思う』(「歎異鈔全購読」P346)と述べておられるので、それに順って理解しました。

臨終がさし迫って、いのちが終わろうとする時に申す念仏も、それは今まで犯した罪やまだ残っている罪を滅するため、に称える念仏ではなくて、まるまる引き受けてお助けくださる阿弥陀仏の大悲願力のご恩に報いるための念仏なのでありましょう、と唯円房は申されるのです。

「なのでありましょう」と推量の表現は、やがて唯円房自身が迎える臨終に経験されるはずのことと、慎重な態度を表しておられるのです。

\*

そして、以下は結論として「つみを滅せんとおもわんは、自力のころにして、臨終正念といのるひとの本意なれば、他力の信心なきにてそうろうなり」と申されるのです。

念仏にこもっている滅罪の功德を期待し、念仏を称えることによって自らの罪をそのつど消し、ことに臨終に念仏を称えて今までの罪を滅して悪念を除き、静かに仏を念じるような心いけば正念に住して浄土に生まれようとする、これは弥陀の本願力をたのみ、自分の称える功德を当てにして正念往生しようとする。それは阿弥陀仏の本願他力を信じていない姿であると申されるのです。

\*

「仏名(名号)には無量の功德があり、仏の名を称えると罪が消滅する、あるいは多くの利益が与えられる」という教説がインド以来諸処に説かれてきました。ですから念仏して罪を滅していこうとすることは間違いというものではありません。ただそういう称名は自力の修行とし

てなされる行であります。

しかしそれも世俗的になつてしまふと現世利益を得るために称えるというような低落した称名にもなつてしまひます。

どちらにしても、宗教的ないしは世俗的なならかの「効果や功德や利益を得る」ために自らが自らの行業として行う念仏は自力の行であつて、阿弥陀仏の誓いを信じる信心の行ではありません。

\*

この自力の念仏は商売繁盛をお願いしたり、無事健康を祈願する念仏のような、世間的な願望を叶えようとする念仏から、さらには宗教上の修行の上から念仏して己の罪業を滅していこうとかあるいは煩惱を浄化していこうという自力修行としての念仏から、浄土教の中においても、念仏した功德で浄土に生まれようとかあるいは称えることによつて信心を得ようという、そういうことまでも含めて自力の念仏といえます。

\*

このことをもつと厳密に言いますと、念仏に自力と他力があるというよりは、念仏を自力の念仏にしてしまふ「自力の心」こそ、自力念仏の正体であるといつていいでしょう。「功德や利益や効果を得よう」と我がために計らう「自我の心が自力の心でありましょう。

ですから、念仏して助かろうとする心、信心を得ようとする心、念仏して自覚を得ようとする心、念仏して宗教的感得を得ようと計らう心、念仏して安心を得ようとする心、念仏して喜びを得ようとする心は自力の心と言えます。

煩惱的自我はつねに「何かを得たい」「ものたりたい」「良きものをつかみたい」と意識的無意識的に思うものです。

自力の心を自我心という広い意味でとらえるなら、たとえ他力の信心をいただいても自力の心、自我の心は起り、自力の念仏を称えることをまぬがれないのではないのでしょうか。そんな自我の心の中にただ中に自我の心にさまたげられず「かならず助ける」との大悲の仰せを聞かせていただくのです。「我が名を称えよ」との誓いを聞かせて頂くのであります。自力の心がすたるとは、自力の心が起これども、その心になんらかまわず弥陀をたのんでいることです。

自我の心、自力の心がやまない私たちも一度本願他力に帰すれば、私たちの心の底に一貫して流れ通つてくださるのが「本願他力をたのみ信心」であり、称える念仏を阿弥陀仏は「仏のご恩に報いる念仏」と、かたじけなくも受け取つてくださるのです。

「阿弥陀様のご恩に報いて称えましよう」という念仏も、何がなしにただ称えている念仏も、「ようこそ称えてくれた」と御恩報謝の念仏と受け取つてくださるのであります。

\*

このようにこの章は、滅罪をするためや臨終に正念になろうとしての念仏は自力であり、せつかく弥陀の本願にないながらそういう念仏に止まっているのは悲しいことである。それは自力他力の違いが分からないからであるし、その本にあるのは本願をたのみ信心がないからであるとの唯円房の思召しはあります。

(了)

《念佛寺春季彼岸会》

3月22日(月)  
午後2時はじまり

(どなたでもご自由にお参り下さい)

《東本願寺に泊まりがけでお参り  
しませんか》 --- 1泊2日です。

- \* 一生に一度は本山にお参りしたい
  - \* 帰敬式(おかみそり)を受けたい
  - \* 法名をいただきたい
  - \* 各地のご門徒さんとであいたい
  - \* 真宗の教えにふれたい
- などの希望の方は是非ご参加下さい。

- 期間・2004年5月22日から23日まで
- 冥加金・10800円(これ以外はいりません)  
ただし、帰敬式(法名)を希望される方は別途  
10000円が必要です。
- 締め切り日・4月24日。連絡は念佛寺へ。